



リトアニアの少年



ユネスコの世界遺産に登録されるビリニュス旧市街

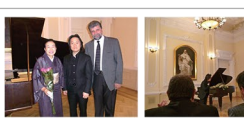


写真家としてのキャリアについて、自身の写真家を公認し、もっと世界の人や旅情を育てたいという方が必要です。 www.motoki-hirai.com

ジョバンニ生誕200周年を記念した「ジョバンニ・ピロニ」主催、ポーランド・イタリアを中心に、場所、国立美術館に出展し、ジョバンニの作家を中心に自作「フパペーのオマージュ」などを演奏した。リトアニアでは、18世紀末まで200年以上に渡り、隣国ポーランドとの連帯国家「ポーランド・リトアニア共和国」と構成していた時期があり、ポーランドと密着していた。第2次大戦中も多くのポーランド系ユダヤ人がリトアニアを経て海外へ亡命した。リトアニアの臨時首都カウナスは旧日本領事館を再現し、日本の通過手紙(ビザ)を無断で発給し続け、約

6000人のユダヤ人の命を救ったとされる。ナチス・ドイツ支配下のポーランドで1200人余りのユダヤ人を救ったドイツ人オスカ・シンドラーにちなみ、日本をシンドラーと呼ばれた。カウナスで行った10回目のリサイタルは、杉原記念開館10周年を記念した「日本リトアニア親善・平和祈念コンサート」(主催:杉原財団、後援:リトアニア日本大使館)であった。会場には、ホロコストユダヤ人大屠殺40周年を生き延びた60代のユダヤ人女性4人の歌があった。私はアンコールで自作の「哀しみのワルツ」を演奏した。おぼあんなちは泣いた。幸運にも生き

残った自分たち、そして国外脱出が叶えられなかった。同輩たちのその後の運命を思ったのだという。もし私が杉原千敏と同じ立場であったとして、再びあか決断がまたかどうかわからない。それでも、スティーヴン・ヘンダーソンが浮かんで、ありがとうとずっと微笑んだとき、少しだけ救われる感じがした。



カウナスでのリサイタル終演後、ピアノの前で、アンコールで「哀しみのワルツ」を演奏する。6月11日(左から、杉原義典氏(杉原財団理事長)、作者、アンコールで「哀しみのワルツ」を演奏する作者、杉原千敏氏(杉原財団理事長))

ベルト三国のリトアニアには、19世紀末まで自然崇拜の多神教とカトリックが混在し、現在も多様な文化と美しい自然に彩られている。しかし一方で、1990年3月11日の独立回復宣言まで、ロシア、スウェーデン、フランス、「ポーランド」、ポーランド、ナチスドイツ、ソ連など複雑に併合された苦難の歴史をもつ。

「311」になったまま私の誕生日でもある。日本人だけがなくリトアニア人にとっても象徴的な数字である。リトアニアは中世以降、多くのユダヤ人移民を受け入れ、名ユダヤオビディム・ハイフェルシュタインなど旧都ビリニュスは20世紀初頭、「北の文化都市」であった。その後、ナチス・ドイツやソ連

の時代に多くが国外へ亡命するを余らしたため、一時30%を超えるリトアニアのユダヤ人の割合は現在、0.1%以下しかない。私は演奏旅行で2度リトアニアを訪れたことがある。リトアニア独立回復20周年にちなみ、2010年6月には、2都市でピアノリサイタルを行った。このうちビリニュスでは、

## フォトエッセイ「国境なき音楽紀行」

### 第4回 リトアニア ～杉原千敏を讃えて～

日頃、音楽を通して人々と交流し、世界各地を旅することが多い。これら旅の印象と感動を、フォトエッセイという形でみんなの一部でも日本の皆さまにお届けできればと思う。 平井元憲



ビリニュス旧市街にある大鐘楼と大聖堂。1999年、旧ソ連下のバルト3国で独立を求め、650kmに渡って人が歩きをつないだ「人間の鎖」の起点となった



首都ヴィリニウスのワグネル湖と浮かぶクラウタイ島村。【高と麗の国】リトアニアならではの美しい風景



撮影: 平井元憲 (本人の写真を引用)



カウナスでのリサイタル終演後、ピアノの前で、アンコールで「哀しみのワルツ」を演奏する。6月11日(左から、杉原義典氏(杉原財団理事長)、作者、アンコールで「哀しみのワルツ」を演奏する作者、杉原千敏氏(杉原財団理事長))



カウナスにある杉原記念会館の隣にある20周年記念コンサート会場をみたカウナスホテルのホール



「杉原ハウス」とも呼ばれるカウナスにある杉原記念会館(旧国庫事務所)。杉原千敏は、この地で「人間の鎖」を発起し、多くのリトアニアの革命者となった



「シャパンソロ」で演奏する筆者



ピアノリサイタルの会場「シャパンソロ」(国立美術館)。かつては臨時の国で演奏を拒むかかせる権威を築いた。長年リトアニアの音楽界を代表とどう